# ２０２５年度　第2回　入学試験問題

## 国　　語　（５０分）

解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

## 一　次の――線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

1　異議をトナえる。　2　ドクソを出す。　3　コウキョを見学する。

4　土台をキズく。　5　道路のヒョウシキ。　6　キゲキ役者。

7　ゼンリャクから始まる手紙。　8　リンカイ学校。

## 二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（句読点や記号も一字と数えます。）

自分の行為（こうい）についてであれば、どうすれば自分がいちばん幸福になるかは基本的に自分でわかります（ここで「基本的に」というのは、人間は目先の快楽に惑（まど）わされて長期的な幸福を失うこともしばしばあるからです）。あるいは、「こうするのがいちばんよい」と思ってやった結果、あまり幸福にならなかったら、選択（せんたく）が失敗だったことが自分でわかります。しかし、他人が何を得れば幸福になるのかは、どうすればわかるのでしょうか。また、よかれと思って決めた社会政策や法律がかえって当事者たちを不幸にしたとしても、①それを決めた政治家にはそれがわからないこともあるのではないでしょうか。

要するに、他人が関わる行為について何が正しいのかを「最大多数の最大幸福」という原理によって勝手に決めてしまってはいけないのではないかということです。あるいは、「最大多数の最大幸福」という原理は［A］的であるように見えて、幸福を測る尺度という点では［B］性がなく［C］的だという問題です。こうした点について、スーパーで何を買うかといった身近な場面から考えてみましょう。

まず、同じ商品がこちらのスーパーでは一二〇円、あちらのスーパーでは一〇〇円で売られていたら、「最大多数の最大幸福原理」は簡単に適用できます。当然、一〇〇円の方で買うべきです。とはいえ、あちらのスーパーが少々遠いのであれば、「わざわざ遠くまで歩くこと」と「二〇円節約すること」のどちらがハッピーなのかを少々考えなくてはなりません。私なら歩きま

すが、②お金よりも時間を節約する方が大きな幸福を得られると考える人も多いでしょう。

では、一〇〇グラム千円の牛肉と、二五〇円の豚肉とでは、どちらを買うべきでしょうか。「牛肉を食いたいと思うが、牛肉はあまりに高い」とつぶやいて豚肉を買う私のような人もいるでしょうし、「牛肉は豚肉の四倍の幸福を私にくれる」といって牛肉を買う人もいるでしょう。これはもう、完全に個人の好みの問題です。自分がより幸福になると思う方を選択するしかありません。

そして、もしもあなたが③自分の給料で一人暮らしをしているのであれば、何を買うかは自分の好みや価値観にもとづいて自由に選択すればよいでしょう。その場合、よその人がどんな好みを持っていようと私には関係ありませんから、「④人それぞれ」といって放っておけばよい。スーパーで牛肉のパックを手に取った見知らぬ人に対して、わざわざ「牛肉でなく豚肉を買うべきだ」などと説得する必要はありません。

しかし、もしもあなたが一人暮らしでないならば、⑤そういうわけにはいきません。たとえば、生計を共にする自分の夫がいつも牛肉ばかり買ってくるのであれば、妻としては「ちょっと待ってよ、毎日牛肉ばかりじゃお金がもったいないじゃない。毎日牛肉だと飽きてくるし」などと言いたくなるでしょう。妻にそう言われたにもかかわらず牛肉を買いつづけたいのであれば、あなたは牛肉を買うべき理由を説明して、妻に納得してもらわなくてはなりません。

その場合、「最大多数の最大幸福原理」による説得を試みるならば、「高価な牛肉を買う方が安価な豚肉を買うよりも幸福だ」という、bいささか矛盾したことを説明するはめになります。そこで、「［　　X　　］のだ」などと言ってみても、妻に「私は牛肉より豚肉の方が好き」と言い返されたら、あなたの好みと妻の好みのどちらが正しいのかを判定することはできません。結局、「牛肉と豚肉のどちらを買うのが普遍的に幸福なのか」を決めることはあきらめて、牛肉と豚肉を交互に買うなど、妻も納得し、自分も我慢できるような解決策を二人で見つけていくしかないでしょう。

このように、⑥「正しい行為」が何かということは、その行為に関わる人の間で決めていくべきものです。自分一人しか関わらない行為の「正しさ」は考える必要がありません。それこそ「人それぞれ」に、自分がいちばんハッピーだと思う選択をすればよいでしょう。しかし、生計を共にする家族がいる場合には、スーパーの買い物だって自分一人だけに関わる行為ではなく、家族を巻き込む行為です。そして「正しさ」は、一つの行為に複数の人間が関わるとき、はじめて作られていくものなのです。

（山口裕之『「みんな違ってみんないい」のか？　相対主義と普遍主義の問題』筑摩書房より）

問一　〰〰線a「しばしば」、〰〰b「いささか」の意味として最もふさわしいものをそれぞれ次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a「しばしば」

ア、だんだん　イ、ついつい　ウ、たびたび　エ、いちいち

b「いささか」

ア、ほんの少し　イ、余計な　ウ、たくさんの　エ、細かな

問二　――線①「それを決めた政治家にはそれがわからないこともあるのではないでしょうか」について

(1)「それを決めた」の「それ」とは何ですか。文章中から十五字以上二十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

(2)「政治家にはそれがわからないこともあるのではないでしょうか」とありますが、それはなぜですか。次の文の空らんに当てはまる二字の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

**不幸になった当事者たちは、政治家にとって（　　）であるから。**

問三　空らん［A］、［B］、［C］に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、A 主観　B 主観　C 普遍　　イ、A 普遍　B 普遍　C 主観

ウ、A 主観　B 普遍　C 主観　　エ、A 普遍　B 主観　C 普遍

問四　――線②「お金よりも時間を節約する方が大きな幸福を得られると考える人」はどのような買い物をすると考えられますか。「～ても、～で買う」という形にまとめて一文で答えなさい。

問五　――線③「自分の給料で一人暮らしをしている」とありますが、これと対照的な状況（じょうきょう）を表す言葉をこれより後の文章中から十二字で探し、抜き出して答えなさい。

問六　――線④「人それぞれ」とありますが、これと同じ意味を表す四字熟語を完成させなさい。

十（　　）十（　　）

問七　――線⑤「そういうわけにはいきません」とありますが、この場合どのようなことができないのですか。次の文の空らんに当てはまる九字の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

（　　）**によって買うものを決めること。**

問八　空らん［　X　］に入るふさわしい言葉を十七字で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問九　――線⑥『正しい行為』が何かということは、その行為に関わる人の間で決めていくべきものです」とありますが、この筆者の考えをふまえ「正しい行為」が決まっていく過程を、具体的な例を挙げて説明しなさい。ただし、その事例が「どんな場合」で、関わる人が「どんな人」かを明らかにすること。また、文章中に挙げられた事例はのぞくこと。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（句読点や記号も一字と数えます。）

会計を終え、ぼくは黒野先輩（せんぱい）についてスーパーを出た。学校の近くだし、どうしても人の目が気になってしまう。きょろきょろしてしまう。

そんなぼくの様子を見て察したのか、黒野先輩が言った。

「だいじょうぶ。だれにも会わない」

「……いや、わからない、でしょ？」

「いいや、会わない。おれといっしょにいれば、めんどうなことは起こらない。だから安心していい。楽しく行こうぜ」

そう言って、すこし猫背（ねこぜ）ですたすたと歩いていく黒野先輩。

ぼくはそれからもびくびくしていたけれど、けっきょく①祇園寺（ぎおんじ）先輩の家に着くまで、だれにも会わずにすんだ。黒野先輩はインターフォンを押（お）すと、低い声で言った。

「警察だ。おとなしくドアを開けろ」

なんだろうね、この人。

『わかった。今開ける』

平然とこたえる祇園寺先輩の声。

黒野先輩はぼくのほうをふり返って、［　i　］をしかめた。

「おい、あいつノーリアクションだよ」

一応うなずいておく。

しばらくして、ドアが開いた。顔を出した祇園寺先輩はTシャツにハーフパンツをはいている。ラフな格好だ。ぼくが会釈（えしゃく）すると、先輩はちいさくうなずいた。

「よく来た。入って」

「おじゃましまーす」

黒野先輩がそう言って、玄関（げんかん）でスニーカーをぬぎ、そそくさと家にあがる。

ぼくもそれに続いた。

「王子、親御（おやご）さんは？」

「王子って言うな。ふたりとも出かけた」
「ほうほう。タルトタタン焼き放題ですね。轟虎之助、洗面所こっちだぜ」
黒野先輩は何度も来ているのだろうか。なれている感じがする。
念入りに手を洗って、それからキッチンに通された。
よそのお宅のキッチンって、なんだか緊張する。ガスコンロじゃなくてＩＨだ。
「じゃ、さっそくはじめようぜ、シェフ」
黒野先輩が言った。どこから出してきたのか、漫画を読んでいる。
「シェフじゃないだろ」
あきれたように祇園寺先輩が［ii］をすくめる。「こういう場合は、パティシエだ」
そういうこと？
ぼくはカバンからレシピを印刷した紙と、ケーキの型を取りだす。
「えっと、祇園寺先輩」
ぼくは言った。
「基本的には、レシピどおりに作るだけです。だから、教えられることはとくにないです。レシピも、ネットで適当に拾ってきたやつだし」
先輩はうなずいた。
「はずかしながら、②レシピどおりに作るってこと自体が、すでに私にはむずかしいんだ」
真剣な顔だった。ぼくはなんて答えればいいのかわからなかった。
「……じゃあ、はじめましょうか」

まず、リンゴを四つ切りにして、皮をむき、芯を取る。鍋にバターと砂糖を入れて、リンゴがしんなりしてくるまで炒める。水気が出てきたら弱火にして、一時間ほどこげないように混ぜながらあめ色になるまで煮つめる。
というわけで、リンゴの皮むきがはじまったのだけれど、祇園寺先輩の手つきを見るに、もうしわけないけど納得してしまった。不器用だ。皮をむいているだけなのに、実が半分くらいになりそう。それを黒野先輩があおるあおる。
「へいへい、ウサギ王子。知ってます？　皮をむくのは、実を食べるためなんだぜ？」
「うるさい。包丁投げるぞ」

祇園寺先輩はリンゴから目を離さずにおそろしいことを言う。けらけら笑う黒野先輩。
「っていうかさ、ピーラーあるじゃん。ピーラー使えよ」
「あれは一度指をスライスしたから二度と使わない」
ぼくは気になっていたことをたずねた。
「どうして、タルトタタンを作りたいんですか？」
先輩の答えは端的だった。「食べたいから」
「自分で？　だれかにあげたいとか、そういうことじゃなくて？」
黒野先輩が笑う。
「きみだって、自分が食べるために焼いているんじゃないのか？」
ぼくはとまどった。そうだけど、そうなんだけど……。
「だったら、食べに行くとか、買ってくるとか、すればいいんじゃ」
リンゴと格闘しながら、祇園寺先輩は言った。
「試したけどお店の味じゃだめだった。それに、人に見られたらはずかしいし」
ぼくはだまりこんだ。ケーキを食べるのは、はずかしいことなんだろうか。
「ケーキを食べるやつははずかしいやつなのか？」
黒野先輩が代わりにたずねる。「はずかしいやつ」ってすごい表現だ。
「そうじゃない」
手元から視線をあげて、祇園寺先輩が言う。
「でも、私みたいなやつが、ケーキが好きだと、へんでしょ。イメージがこわれる」
その声にはきりきりと痛みの気配があって、だけどぼくには、先輩がなぜそこまで自分のイメージにこだわるのか、さっぱりわからなかった。
「そんなのとっととこわせばいいって、ずっと言ってるんだけどな」
黒野先輩はそう言って、漫画のページをめくった。
リンゴを煮つめている間に、タルトの生地を作る。鍋を混ぜるのは黒野先輩に任せた。
「こがすなよ、黒野」

「皮むきも満足にできない王子に、言われたくはないな」
薄力粉、塩、砂糖をボウルにふるい入れ、冷たいバターをくわえて切るように混ぜる。そこに、水で溶いた卵黄をすこしずつ入れ、混ぜながらまとめていく。
「あ、こねる感じじゃなくて、切るように……」
祇園寺先輩の手つきを見ながら、ぼくは言う。粉が飛び散っている。
「なかなかむずかしいね」
そう言って、額の汗を袖でぬぐう祇園寺先輩。
「リンゴ、あめ色になってきたぞ」
「わかりました。火を止めちゃってください」
「ＩＨだけどな」
「黒野、揚げ［　iii　］をとるなよ」
あめ色に煮つまったリンゴをケーキの型に敷きつめる。そのとき、先に汁を入れておく。これがカラメルになる。リンゴの上に三ミリほどにのばしたタルト生地をのせ、フォークでまんべんなく穴をあける。そして百九十度に熱したオーブンで、一時間半、焼く。
「一時間半。長いな」
黒野先輩は言った。オーブンのふたをしめて、スイッチを入れる。
「でも、なんとなく、やりとげた気分だ」
祇園寺先輩の言葉に、黒野先輩が［　ii　］をすくめる。
「まあ、王子にしては及第点だろ」
「えらそうに言わないの」

祇園寺先輩は紅茶をいれてくれた。
それから、ケーキが焼けるまで、ぽつぽつとぼくらは話をした。
なんでもないような話。どうでもいい、くだらない話。
だけど、時間とともに、それは大切な話に変わっていく。
「私さ、むかしから、男勝りって言われてたんだ」

二

祇園寺先輩はそんなことを言った。
「男子相手にけんかもしたし、スポーツも得意だったし。ほら、見た目もこんなだし。名前は【　A　】なのに、【　B　】みたいって、みんなに言われてた」
ぼくはうなずいた。
「ぼくは【　C　】なのに【　D　】みたいだって言われます」
「まじでよけいなお世話だな」
うんざりしたようにそう言って、黒野先輩が紅茶をすする。
ぼくは、気になっていたことをたずねた。
「あの……だけど、先輩はどうして、そこまで自分のイメージにこだわるんですか？」
祇園寺先輩はしばらくだまっていた。黒野先輩もなにも言わない。
聞いちゃまずかったかなと、心配になってきたころ、ようやく祇園寺先輩は口を開いた。
「私はさ、うれしかったんだよ。小三で剣道をはじめて。どんどん強くなって。ボーイッシュだとか、かっこいいとか、そういうふうに言われるのが」
紅茶をひと口飲んで、先輩は続けた。
「誇らしくてならなかった。べつに女子らしくなくていいんだって、いや、こういう女子もいるんだって、私が生きていることで、証明できている気がした。羽紗を見てると勇気が出るって、自由でいていいんだって思えるって、そんなふうに言ってくれる子もいた」
大切な思い出をなぞるように、そう言う祇園寺先輩。
「だけど……」と、ぼくは言いよどんだ。
先輩はだまってぼくの言葉を待っている。だけど、なんだろう。言っていいのかな。失礼かもしれない。迷っていると、黒野先輩が笑った。
「そうだな。あんまり、今の王子は自由には見えないよな」
そのとおりだった。
今まで作りあげてきたイメージを守ろうとするあまり、ケーキを食べることすら、自分にゆるせずにいる。少なくとも、それを他人に知られたくないと思っている。
「そうだね。こんなのはもう、呪いみたいなもの」

祇園寺先輩はしみじみとうなずいて言う。
それからちいさく笑った。なつかしむように、だけどかなしそうに。
「六年生のころ、友だちになった女の子がいたの。世間一般に言われている意味で、つまりはそれも偏見だけど、女の子らしい女の子だった。フリフリしたかわいい服を着て、絵を描くことと、お菓子作りが好きで。その子が私にタルトタタンの味を教えてくれた」
そう言って、祇園寺先輩は、ぎゅっと眉間にしわをよせる。
「その子の家で、その子が作ってくれたタルトタタンを食べたとき。こんなにおいしいものがあるのかって、そう思った。だから、そう伝えた。そしたら、あの子、ほっとしたように笑って、言ったんだ」

――私さ、羽紗ちゃんのこと、ちょっとこわいって思っていたけど、気のせいだった。
――なあんだ。やっぱり羽紗ちゃんも女の子なんだ。

「その声はひどく弾んでいて。だけど私はぶんなぐられたようなショックを受けた」③
ぼくは黒野先輩の顔をちらりとうかがった。とくに感想はないようだ。もしかすると、すでに知っている話なのかもしれない。
祇園寺先輩は続けた。
「それから、私はその子と距離を置いた。ううん、その子だけじゃない。あまいものや、女の子らしいとされるものからも、ますます距離を置くようになった」
私は「らしさ」にとらわれたくなかったんだ――そう、先輩は言った。
自由でありたかった。そんな自分のことが好きだった。
「……だから、やっぱり女の子じゃんとか、女の子らしいところもあるんだねとか、言われたくなかった。そういう目で見られるくらいなら、死んだほうがまし」
思いつめた顔で、先輩は言った。
ぼくは、いつになくしずかな、なにか、神聖なものにふれたような気持ちになった。
心はしんとしていて、だけど、そこのほうではふつふつとなにかが燃えている。
らしさ。
男の子らしさ。女の子らしさ。自分らしさ。

ボーイッシュ女子。スイーツ男子。
虎は虎だから。羽紗は羽紗だから。
轟くん、かわいいし。ケーキ焼く男子とか、アリよりのアリっしょ。今はいろんな趣味があっていいと思う。羽紗を見てると勇気が出る。自由でいていいんだって思える。なあんだ、やっぱり女の子なんだ……。
④いろんな言葉が、声が、ぼくの内側で響いては消える。
黒野先輩が言った。
『『ボーイッシュな女子らしさ』にとらわれてないか？」
ぼくはおずおずとうなずいた。祇園寺先輩はちいさく笑った。
「そうだね。わかってるんだ。本末転倒だってことは。私はけっきょく、べつのらしさにとらわれていて、ぜんぜん自由なんかじゃない。でも……」
紅茶の入ったマグを両手で包むように持って、先輩は続ける。
「無理なの。私、女の子みたいって、女の子らしいって、そう言われるの、ほんとにこわい。そんなの、その人の偏見だってのも、わかってる。だけど、だめなんだよ。そう言ってくる人たちは、私のことを『無理して男子ぶってる女の子』っていうふうに見る。そういうありふれた話に落としこもうとする。それが、ほんとうにいやなんだ」
黒野先輩は言った。
「人は、枠組みから外れたやつがいるのがこわいんだよ。だから、自分がわからないものに出会うと、おかしいって言って攻撃したり、わかりやすいでたらめに押しこんで、わかった気になったり、する」
くっくと笑う先輩。ぼくはなにも言えなかった。

焼きあがったタルトタタンをすこし冷まして、ケーキ型から外す。
ぼくたちはそれを切り分け、一切れずつお皿に取った。黒野先輩がいそいそと、あめ色のリンゴを頬張って笑う。
「ふぐふぐ。すばらしいね」
祇園寺先輩は、おごそかな表情でタルトタタンを口に運んだ。
ひと口。もうひと口。
しずしずと味わうようにそれをかんで、こくんとのみこむ。
「……おいしい」

先輩はつぶやいた。そうして、泣きそうな声で続けた。
「⑤ばかみたい。こんなおいしいのに。むかつく」
そのまま、祇園寺先輩はうつむいて、なにかを考えこんでいた。ぼくはやっぱり、なにも言えなかった。だまってタルトタタンを食べた。リンゴとカラメルの香り。
あまずっぱい味が口いっぱいに広がって、だけど、今日はただただ、かなしい。

帰り道。
黒野先輩と別れたあと、学校の近くを歩きながら、ぼくは龍一郎のことを考えた。
サッカー部のキャプテン。文武両道の優等生。あの人はいつもぼくに言う。
「人がなんて言おうと関係ない。自分の道を行けよ」
でも、龍一郎はきっと、ぼくが歩いている道の険しさを知らない。
ぼくの歩幅を、体力を、道に落ちているちいさな石のひとつひとつが、はだしの足をきずつける感触を……それは、おたがいにそうなのかもしれないけれど、少なくともぼくは、だれかに「人がなんて言おうと関係ない」なんて、言えない。
人になにかを言われることは、つらい。
自分の道を歩いているだけで、その道に勝手な名前をつけられるのは、歩き方に文句をつけられるのは、どんなに好意的でも笑われるのは、ほんとうにつらい。
祇園寺先輩の思いつめた表情。ウサギ王子の抱えた秘密。

——女の子みたいって、女の子らしいって、そう言われるの、ほんとにこわい。

そうだ。
ぼくらは自分のままでいたいだけ。そうあるように、ありたいだけ。
それを、⑥関係のないだれかに、勝手なこと、言われたくなかった。

ポケットでスマホがふるえる。ぼくはそれを取りだして、ラインアプリを開いた。
「今日はありがとう。いろいろぐちを言ってしまってごめん」

祇園寺先輩からのメッセージ。
ぼくはしばらく考えて、ちいさくうなずいた。フリック入力で、画面に文字をつむぐ。
「先輩。また、タルトタタンを焼きに行ってもいいですか？」
「ぼくは、もっと先輩と話がしたいです」
既読はすぐについた。だけど、返信はなかなか来なかった。

「あれ、虎じゃん。どこ行ってたの？」
その声に顔をあげると、クラスメイトの女子たちがこっちを見ていた。
部活帰りだろうか。数人、かけよってきて、勝手に頭をなでてくる。
「家、こっちのほうじゃないよね？　お出かけ？　いいなあ」
「……秘密」
ぼくはかわいた声で答える。すると、女子のひとりが言った。
「あれ？　なんか、あまいにおいがする。もしかしてケーキ焼いた？」
ぼくは無視する。女子たちがキャッキャと言いあう。
「においますね」
「どこで焼いたんだろ。よそのおうち？」
「よそのおうちって、だれのおうちよ」
「そりゃあ……あれですよ、彼女、とか」
黄色い笑い声。はじけるような笑顔。
無邪気にはしゃいでいる、自覚のない加害者の群れ……。
ぼくは歯を食いしばった。
背中を向けて、その場を立ち去る。一刻も早く。
「あれ、待ってよ虎。なに？　おこっちゃった？」

頭の中がぐらぐらする。胸のおくでなにかが燃えている。ちりちりとのどをこがす、不愉快な熱。口の中に残っているタルト

タタンの味。断りもなく頭をなでてくる手の感触。どこからかこだまする、今にも泣きそうな祇園寺先輩の声。

――ばかみたい。こんなにおいしいのに。むかつく。

「虎ちゃん、かわいい顔が台なしですよ～？」

「ほんとほんと！　ほら、いつもみたいに笑って！」

ぼくはふり返って、さわいでいる女子たちをにらみつける。

それから、大きく息を吸いこみ、精いっぱいの声でさけんだ。

今までずっと押さえこんできた思いが、明確な言葉となって夕日の下に響く。

女子たちの表情が固まるのを見ながら、ぼくは思った。

強くなりたい。ゆれないように。

自分が自分であるために、闘(たたか)えるように。

（注）龍一郎……「ぼく」の兄。

（村上雅郁(むらかみまさふみ)『きみの話を聞かせてくれよ』フレーベル館より）

問一　――線①「祇園寺先輩の家に着くまで」とありますが、「ぼく」はどのような目的でこの家を訪れましたか。次の文の空らんに当てはまる言葉を、簡潔に答えなさい。

**祇園寺先輩に（　　）ため。**

問二　空らん［ i ］、［ ii ］、［ iii ］に入る最もふさわしい言葉を次のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、足　イ、胸　ウ、眉（まゆ）　エ、顔　オ、肩（かた）　カ、腰（こし）

問三　――線②「レシピどおりに作るってこと自体が、すでに私にはむずかしい」について

(1)「むずかしい」理由を「ぼく」はどう考えていますか。次の文の空らんに当てはまる五字以内の言葉を文章中から探し、抜き出して答えなさい。

**先輩は（　　）だから。**

(2)(1)の答えとなる先輩の特徴（とくちょう）が表れている十字以内の一文を「タルト生地を作る場面」から探し、抜き出して答えなさい。

問四　空らん【　A　】～【　D　】に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、Aウサギ　Bハムスター　C虎　Dライオン
イ、Aウサギ　Bライオン　C虎　Dハムスター
ウ、A虎　Bハムスター　Cウサギ　Dライオン
エ、A虎　Bライオン　Cウサギ　Dハムスター

問五　――線③「私はぶんなぐられたようなショックを受けた」のはなぜですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、友だちから「らしさ」でくくられたから。
イ、友だちがわざと意地悪なことを言ったから。
ウ、友だちがお世辞をそのまま信じたから。
エ、友だちのような女の子らしい人になりたいから。

問六　――線④「いろんな言葉が、声が、ぼくの内側で響いては消える」について

(1)　「いろんな言葉」を比ゆで表現している十九字の言葉をこれより後の文章中から探し、抜き出して答えなさい。

(2)　これらの言葉を発する人たちを「ぼく」はどのような存在だととらえていますか。これより後の文章中から十一字で探し、抜き出して答えなさい。

問七　――線⑤「ばかみたい。こんなにおいしいのに。むかつく」とありますが、このときの「祇園寺先輩」の気持ちとして最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア、タルトタタンをおいしいと感じているのに不愉快になってしまう自分に対して、不安になっている。
イ、タルトタタンをおいしいと感じるのは女の子らしいと考え、それを必死に隠そうとしている。
ウ、タルトタタンはおいしいのに、過去の記憶のせいで不快になってしまう自分を嫌に思っている。
エ、タルトタタンを自分の力だけでおいしくつくれなかったことにいらだちを感じている。
オ、タルトタタンを以前一緒に作った友達のせいで、今でも苦手であることに不満をもっている。

問八　――線⑥「関係のないだれかに、勝手なこと、言われたくなかった」とありますが、「関係のないだれか」が「勝手なこと」を言ってしまうのはなぜですか。次の文の空らんに当てはまる漢字二字の言葉を、これより前の文章中にある「祇園寺先輩」のセリフの中から探し、抜き出して答えなさい。

**関係のないだれかは（　　）を持っているから。**

問九　――線「ぼくが歩いている道の険しさ」とありますが、ここでの「道」とはその人の《生き方》と考えられます。「ぼく」や「祇園寺先輩」が感じている「道の険しさ」とはどういうことですか。「～のに、～こと」という形にまとめて説明しなさい。ただし、「自由」と「不自由」という語を必ず用いること。

二〇二五年度　第二回入学試験　解答用紙

# 国語（一）

| 受験番号 | | | |
|---|---|---|---|
| | | | |

| 氏　名 |
|---|
| |

一枚目

二枚目

合計

一

1 トナ（える）

2 ドクソ

3 コウキョ

4 キズ（く）

5 ヒョウシキ

6 キゲキ

7 ゼンリャク

8 リンカイ

二

問一
a
b

問二
(1)
(2)

問三

問四

問五

問六
十
十

問七

問八

問九

15

二〇二五年度　第二回入学試験　解答用紙

# 国語（二）

三

問一

問二
i
ii
iii

問三
(1)
(2)

問四

問五

問六
(1)
(2)

問七

問八

問九

| 受験番号 | | | |
|---|---|---|---|
| | | | |

| 氏　　名 |
|---|
| |